

学校 教育 目標	『心身ともにたくましく、ふる里を愛する 人間性豊かな 子どもの育成』 なかよく たっしやで きばる子 (共生) (自立) (創造) 徳 体 知	昨 年 度 の 評 価 概 要	学校関係者評価 B 少人数であることが、多くの体験ができる等の良いところもたくさんあると思うが、反面、もう一步の努力やチャレンジを諦めたり、もう一言を発しようとし、しなくても次に進んでいくという場面も見受けられる。子どもの心が動くような働きかけを今後も学校や地域でできるとよいと思う。新型コロナに対する対応が大変な中で、学校教育活動が適切に行われている。地域住民も、関わってけるとよいと思われる。朽木の良さを児童がより感じられる教育活動を期待したい。オグラス登山や朽木一周サイクリング等は朽木ならではの活動であり、準備を徹底して実施してほしい。1人1台のタブレットが配備され、子どもたちも使いこなしている。学年の発達段階に合わせて、より課題追究の自主学習にできるとよい。	中 期 的 目 標	1. 地域とともにある学校を目指す + 『夢』『志』をもって学び合う学校づくりを推進する ・中学校区保幼小中一貫教育9年目 ・コミュニティスクール5年目 2. 授業改善・指導力を向上し、新学習指導要領につなぐ ・道徳・外国語・ICT機器活用・学び合いに重点を置いた授業改善・授業研究 ・地区でキャリア教育に取り組み、「くつつき愛シート」を全学年つないで実施 3. 「気づき・考え・行動する」子に「伝える」場を与えて、プレゼンカの伸長を促進 (コミュニケーションカの育成)
----------------	---	--------------------------------------	--	-----------------------	---

評価項目(指導力点)		指標:到達目標(成果指標・取組指標)		達成状況		評価		改善方策		学校関係者評価	
なかよく(徳)	①仲間・集団づくり ・心に響く道徳授業 ・いじめを許さない学校づくり ・共感的人間関係の育成	保護者への道徳授業公開 (各学年 1回以上/年間) 水曜1校時または2校時を「道徳」の時間として、計画通り進める	コロナ禍で工夫しながら学習参観を実施し、道徳参観は12月に1回実施。各学年のカリキュラムに基づき道徳授業を展開(通年 毎水曜日)。	B	A	今後も道徳授業を全学年水曜の午前の時間割に位置付けて実施することで、時数確保と授業改善の機運を高める。道徳の保護者参観は継続。ICT機器や外部人材を活用した道徳も模索していく。児童発表の場を複数回持てるよう工夫する。	・道徳は、多様な考え方・生き方に出会うことで、自分自身を見つめ直すことにつながる事が大切だと考える。少人数学年では、いろいろな手立てを工夫してほしい。 ・いじめ防止は、小さな事柄でも、気づいた時に、情報共有するという基本姿勢の確認が最も大切だと思う。 ・まだまだコロナの影響がある中、校内外共にコロナ禍における最大限の学びや体験ができたと思う。 ・特にサイクリングや宿泊ありの修学旅行は、がまんを重ねてきた子どもたちにとって、一生の思い出になったと思う。 ・福祉学習については、現行の学年の内容と共に、学年に応じて、人との違いを認め合える機会があると、更に高まるのではないかと思います。保護者や祖父母もその事に共有できる機会があるとよいですね。				
		児童集会での個人発表機会 (1回/年間)	一堂に会しての児童集会は実施していないが、始業式・終業式後の「みんなの広場」(Zoomにて実施)で年間1回の個人発表実施(100%)。	A		地域・自然や地域人材との連携により、朽木ならではの学習を継続し、さらに積み上げていく。学習発表の場を3学期に設定することとし、学習成果を参観者に伝え、児童のプレゼン能力・発表力を伸ばす場とする。					
	②共生する力・生き方学習継続 ・特色ある地域学習の継承発展 ・森林・田んぼ・自然体験活動 ・他校との交流活動の実施	(低学年)稚鮎放流・町探検 (中学年)森林学習・どんぐりプロジェクト (高学年)朽木サイクリング・米作り・どんぐりプロジェクト	各種団体・地域連携や保護者ボランティアの協力を得て地域学習を実施。「朽木の自然の良さを知ることができました」(児童100%)	A		A		「学校いじめ防止基本方針」の見直し・改訂を随時実施し、実効性のある取組とする。社協と連携した福祉教育は各学年の内容を継続していく。人権教育を中心にいじめ防止に向けた意識を更に高めていく。			
		キャリア教育に繋ぐ学習発表機会 (1回/年間 3学期実施)	感染リスクを避けるため、全校が一室に会することはできなかったが、各学年1年間の学びの成果を保護者の前で発表(2/10学校開放日)。	A							
	③特別支援教育・福祉教育推進 ・個別支援計画による指導相談 ・保護者・専門的関係機関連携 ・障がい児(者)理解教育推進	福祉教育計画的実施(社協連携) (各学年1単元/年間)	社会福祉協議会と連携、各学年の発達段階に応じた学習を実施(100%)。1年視覚障害 2・3年聴覚障害 4・6年高齢者 5年ユニバーサルデザイン	A		B					
毎月「校内人権の日」の取組実施 (100%) 県の人権学習資料の活用(全学年)		人権を大切にする学級目標を立て、取組後の振り返りも実施。(100%) 「人にいじわるや仲間はずれをしないようにしています」(児童98%)									
たっしやで(体)	④命を大事にする環境づくり ・命の学習・安全教育取組 ・教育相談週間計画実施 ・SOSアンケート等調査結果の活用	『命の授業』2・4・6年(1回/年) 避難訓練・引き渡し訓練(4回/年) 「学校が楽しい」と思う児童(100%) アンケート調査結果をもとに指導対応、ケース会議(随時)	外部講師を招いて発達段階に応じた「命の授業」を計画的に実施。非常時の引き渡し訓練は、隔年実施のため次年度保幼小中合同で実施予定。 「学校は楽しい」(児童92%) いじめアンケート等の活用や教育相談週間・ケース会議の取組により、児童個々に応じた受け止めや対応ができた。	A	B	今後も、校外活動における安全マニュアルに基いた安全対策を徹底して教育活動を行う。次年度は合同避難訓練を実施する。教育相談では、各種調査等に即応した面談・対応を実施し、関係課機関とも連携していく。	・ノーマディアウィークの取組は、継続して調査・分析・フィードバックされており、今後も続けていくべきだと思う。 ・スマホの使用率は、今後も高くなっていくと思われ、児童・保護者共に研修を毎年されることが必要だと思う。 ・ノーマディアウィークは、かなり定着しているが、一方でマンネリ化も見られ、ノーマディアウィークが終わると元に戻るという現状もあるため、改善は必要である。 ・運動会は、子どもたちのがんばりがよく伝わった。来年度は、より制約のない形にしてほしい。				
		⑤生活習慣確立・食育推進 ・『NO!メディアウィーク』 ・『早寝 早起き 朝ごはん』 ・保健学習・食育指導の充実	『NO!メディアウィーク』の工夫実施・中学校区取組(100%) 栄養教諭による食育指導 (各学年 100%) 朝食摂取率(100%)	10年以上の取組として定着(毎学期実施100%)。2年前から保幼小中一貫教育の一環として中学校区全体で取組を進めている。 食育指導は栄養教諭の指導により全学年で実施(100%)。6年生は養護教諭も入ったTT指導。朝食摂取率(毎日食べている94%だいたい食べている6%)		A		今後も中学校定期考査の時期と合わせたノーマディアウィークの取組とする。今年度の保幼小中のアンケートを生かして内容を検討。栄養教諭による食育指導は、学活、保健、家庭科等の一環として今後も継続。			
	⑥体力向上策の継続 ・感染症対策に配慮した工夫 ・苦手種目克服・技能習得 ・みんな遊び・外遊びの奨励		感染症対策に配慮した体育の実施、運動会等の体育的行事の開催	運動会は、6月の平日に小学校単独開催。感染リスクを避けるための時間短縮や種目の工夫で実施。		B		次年度の運動会も小中単独で開催予定(小中同一日午前:小午後:中)。午後は中学校の体育祭を参観できるようにする。日常の体育科や体育行事を通して、運動に親しむきっかけづくりをしていく。			
		体育的行事の内容工夫 鉄棒・一輪車・縄跳び・竹馬遊び等の技を増やす児童(100%)	運動会やベースランニング走などの体育行事をきっかけに、体力づくりに積極的に取り組む児童が多かった。(児童96%)	B							
	きばる(知)	⑦学力向上のための授業改善 ・「学び合い」授業の追究 ・課題解決的な学習の確立 ・高学年一部教科担任制	「授業が楽しい」「勉強がわかる」児童(100%) BUT小中合同学び合い学習実施(100%) 学力調査・確認テスト結果活用 PDCAによる学ぶ力向上策の推進(毎学期)	「勉強は楽しい」(児童88%) 「勉強はよくわかる」(児童100%) BUT小中合同学び合い学習実施(年間3回実施100%) 6年生全国学力調査は国語・算数・理科ともに高い正答率。「学びの基礎チャレンジ」の実施結果と併せて、学ぶ力向上対策に生かしている。		B		B	少人数の良さを生かすとともに、ICT機器の効果的活用による個別最適化の授業をめざす。BUTの取組継続。各種調査結果を分析し、見えてきた課題の解決に向け授業研究会を実施し、授業改善を行っていく。	・課題解決的な学習を展開するためには、児童の課題意識の喚起が最も大切である。家庭学習や自主学習での児童・保護者評価では、その点でもの足りなさがある。特に高学年での自主学習における新しい視点を見つけられるような取組を期待する。 ・タブレットだけでなく、MESHやBOLTなども使いながら、自ら考えるための道具として子どもたちがICT機器を使いこなしている姿が素晴らしいと思う。 ・基本的な作文能力を伸ばす宿題や取組が少ないので増やしてほしい。	
			⑧学びの保障に向けた取組 ・ICT機器の有効活用 ・外国語活動・道徳指導の工夫 ・朝学習の充実(漢検等)	タブレット端末等のICT機器を活用した授業 (毎日) 朽木東小漢字検定の実施・朝読書の定着 外国語活動・考え、議論する道徳授業(毎週水曜日実施)の充実		タブレット一人1台端末配置の環境を生かして、毎日の学習活動で効果的に活用(100%)。漢字検定(毎週火曜日)や朝読書も定着。 ALTとの外国語科・外国語活動は内容が充実。「道徳授業などで、相手の気持ちを考える、ルールを守るなどを一生懸命考えました」(児童92%)			A		児童のタブレット端末活用力も向上。市内先進校としてICT機器タブレット等の活用に向け、更に実践を蓄積する。漢字検定は、学習意欲の向上につながり、成果も出てきているので継続。
⑨学習規律確立・学習習慣定着 ・家庭学習「10分×学年」以上 ・朝読書 朝学習 補充学習 ・図書貸出冊数増(図書加)活用)		家庭学習時間10分～15分×学年 (95%以上)		全学年タブレット端末を毎日持ち帰って家庭学習でも活用。 「宿題や自主学習に進んで取り組んでいます」(児童86%)	B	タブレット端末の持ち帰りに伴い、従来の家庭学習の内容も改善していく必要がある。読み聞かせや図書サロンの本の貸出は、児童も楽しみにしている。今後さらに読書環境の充実や家庭への啓発を行っていく。					
		朝読書の実施(週3日) 図書貸し出しの利用(全学年) ボランティアによる「朝の読み語り」の実施(1～3年)	コロナで中断していた「朝の読み語り」は年度当初から実施。 「学校や家で進んで本を読みました」(児童78%)	B							
学 校 チ ーム		⑩地域とともに・繋がり響きあう学校 ・コミュニティスクール5年目 ・学校情報提供・地域連携の推進 ・保幼小中の連携	学校運営協議会・地域学校協働活動との一体化 学校地域連携カリキュラムの作成 学校だより(月1回)、保健だより(月1回)、結の会通信(随時) メール配信(毎週土曜日)	学運協でつきたい力について熟議を行い小中一貫した学校地域連携カリキュラムを作成できた。 協働活動は地区推進員のコーディネートにより活動を工夫して実施。 各種広報については目標回数をクリアしながら発行。	A	A	熟議を増やして、学校や地域の課題を関係者で共通理解し、その解決に向けての方向性を見出していく。今後子どもと地域の方が語り合える場を設定する。推進員と協力して地域学校協働活動をさらに推進していきたい。 ・熟議の中で共有・合議できたことは、すぐ実践して、振り返りつつ前進できていた。 ・「すみまち」との協力を強化して、より幅広く地域の方の力をお借りできると良いと思う。				

学校関係者評価	総 評	評価	学校関係者評価を踏まえての改善点
	○基礎学力は定着しており、学校としての努力が実を結んでいると思う。 ○地域と連携して体験学習を積み重ねていく事が大切だと感じる。それを学校地域連携カリキュラムとしてまとめられたことは良かったと思うが、そのカリキュラムを生きたものにしていくためには、年度ごとの振り返りが大事だと思う。 ○今以上の少人数になった時の方向性を模索する時期に来ているように思う。 ○コロナ禍も3年目となり、第7波や第8波もあった中、子どもたちの「今しかできない」学びや体験をできるだけ守りたいという学校や先生方の思いがよく伝わった一年だったと思います。特にサイクリングは、実施が危ぶまれた中、先生方の努力や、保護者や地域の方の協力、子どもたちのがんばり、すべてが合わさって行うことができ、保護者としても、子どもたちの良い笑顔に本当に感動しました。今後、児童数が減少していくことは確実ですが、少人数だからこそ、自然豊かな朽木だからこそできる学びや体験をこれからも続けていきたいと思います。 ○いろんなことに丁寧に、子どもたちに関わってくださる様子を伺い、大変有り難いことだと思っています。子どもの数がどんどん減っていく中、高校やその他の多人数の中に入った時に、何か自信が持てるものがあれば良いなあと思います。少人数だからこそ、そんな一人ひとりにつきたい力と向き合えるのではないかと思います。	B	・近年の児童数減少により、職員体制にも影響が出ており、今後、一部学年で複式学級編成となることから、状況はますます厳しくなっていく。3年間のコロナ禍の中で工夫しながら教育活動を行ってきた経験を生かし、行事の厳選や見直しを行い、「子どもの学び」を最優先にした教育活動を行っていく。 ・今後も子どもたちにつきたい力について熟議しながら、学校運営協議会や地域学校協働活動を軸に、保護者や地域との連携を深め、理解、協力を得ながら、外部の力を取り入れた教育活動を行っていく。 ・熟議を重ねて編成した保幼小中一貫した「学校地域連携カリキュラム」を円滑に実施するとともに、常に検証、見直しを行っていく。保幼小中一貫教育の取組ともリンクさせ、情報発信を積極的に行い、「結の会」を中心とした地域学校協働活動のさらなる充実を目指す。 ・朽木独自の保幼小中一貫教育を継承・発展させていく。ノーマディアウィークの取組を改善しながら継続していく。 ・市内ICT活用先進校として、タブレット端末を有効活用した授業実践をさらに積み上げていく。 ・朽木地区の自然や文化を生かした教育活動を大切に継承していく。そのことで「ふるさと朽木」を大切にする心情を育んでいく。 ・少人数の環境下で手厚くきめ細かく指導できる良さを生かして、児童一人ひとりの思いに寄り添いながら、相談や支援をしていく。

4段階評価(A 目標を十分に達成 B ほぼ目標を達成 C やや不十分 D 改善を要する)